2025 年 5 月

社会技術研究開発事業
科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム
研究開発プロジェクト 事後評価報告書

「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム」
プログラム総括　　唐沢　かおり

１．課題代表者

児玉 聡（京都大学 大学院文学研究科　教授）

２．課題名

現パンデミックの ELSI アーカイブ化による感染症にレジリエントな社会構築

３．実施期間

2021（令和 3）年 10 月 1 日 ～ 2025（令和 7）年 3 月 31 日

４．事後評価結果

本プロジェクトは、新聞・雑誌記事データベース、学術文献データベース、Web サイト等を用いて COVID-19 を中心とした公衆衛生的危機における重要な ELSI 課題及びそれへの対応について調査し、論点を整理してアーカイブ化すると共に、これらの成果を関与者と共有することにより、トランスサイエンス問題に対する人文社会系研究の社会実装の方法論を提示することを目指した。

また、本プログラムにおける研究開発として、COVID-19 の社会的・倫理的・法制度的課題に関するアーカイブを早期に設計し、短期的な対応から中長期的なパンデミック対策に活用できるよう、多角的な視点からの設計や国際社会への発信を通じて、その可能性を広げることを期待した。

A. 総合評価

一定の成果が得られたと評価する。

COVID-19 パンデミックに関する知見を今後の ELSI 研究に活用するためにアーカイブ化するという点について、十分な成果が得られたのみならず、COVID-19 に関する動向および ELSI 全般について、多様な研究活動を実施し、成果をあげてきた。COVID-19 に関する各国の取り組みを網羅的にまとめた Web サイトを作成・公開し、容易にアクセスできる形にしたことは高く評価できる。また、プロジェクト内外でのミーティングやシンポジウムも精力的に行われ、その結果を「今後の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策における倫理的法的社会的課題（ELSI）の観点からの提言」として発表したことも大きな成果である。加えて、若手の人材活用についても積極的に取り組み、若手研究者自身が成果を挙げてきたことも評価できる。

今後の活用に向けた展望についても、日本に特徴的なパンデミック対策についての資料をアーカイブし、将来に向けた提言などの議論を行う際の基礎が構築されたことは、高く評価できる。トランスサイエンス問題に対する人文社会系研究モデルとして積極的な発信活動を

推進してきたプロジェクトであり、人文社会系研究者が ELSI に関わる際の課題について明らかにしたことを、今後の改善にどのようにつなげるのかという観点からも、さらなる発信が期待される。

一方で、どのような着眼点で何を、なぜアーカイブしたのか、またはしなかったのかといった点については、報告書等から読み取ることができず、アーカイブを「活用」する側の目線から見ると、収集事例の網羅性など疑問が残る可能性もあり、より詳細な説明が必要と思われる。また、活用については、政策決定の基礎資料として位置づけられているものの、それらが政策プロセスにおいてどのように参照されたのか、またされうるのか、どうされうるべきかなどが不明確であった。これらの課題を含む活用方法については、今後の検討に期待したい。

B. 項目評価

（1）研究開発プロジェクトの目標の達成度

概ね達成したと評価する。

本プロジェクトの目的である COVID-19 を中心とした公衆衛生的危機における ELSI の論点整理・アーカイブ化と、関連するステークホルダーへの共有、およびトランスサイエンス問題に対する人文社会系研究の社会実装の方法論の提示について、概ね達成されたと評価することができる。

特にアーカイブについては、COVID-19 パンデミックに関連する ELSI 並びに課題解決への取り組みについて、代表的な資料を整理しただけでなく、研究や議論に資する形を追求する工夫が見られた点が高く評価できる。一方で、資料を抽出するにあたっての基準や、カバーする国の選択基準を、より明確に示すことも必要であったと思われる。また日本の感染症法に関する位置付けについては、他の行政分野との水平的な比較の観点が欠けており、政府・自治体の責任回避機能の評価など、当該分野でなされている ELSI と関連の深い議論との連携も、今後の課題として残っている。

プロジェクトの公式ウェブサイトでの成果発信に加えて、「今後の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策における倫理的法的社会的課題（ELSI）の観点からの提言」として、新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボードにて発表を行ったことも精力的な研究成果の一環として評価できる。一方、研究成果の具体的な活用方法や、政策形成への貢献のあり方について、より明確にすることで、実践的な貢献可能性が、より高まったのではないかと思われる。

トランスサイエンス問題に対する人文社会系の研究モデルの開発に関しては、ELSI フォーラムやメディア、市民との意見交換など、複数のセッションを実施したことが評価できる。これらの活動を通じて得られた成果を今後さらに構造化し、まとめていただくことを期待したい。

（2）研究開発成果の創出状況

一定の成果が得られたと評価する。

本プロジェクト全体の運営および進行については、十分な対応がなされていたと言える。特に、若手研究者を積極的に雇用し、アーカイブの作成、国内外の論文・報告書の要約・紹介、国際学会での発表や英語での論文執筆など、ELSI 研究の実践的な訓練機会を多く提供した点は大きな成果である。プロジェクトに参画した若手研究者については、今後の国際的な活躍が期待できると考える。

また、本プロジェクトが他の研究プロジェクトと連携しながら活発に活動を推進してきた点や、国内外の専門家との連携を強化し、ELSI/RRI 研究の国際的な発展に貢献してきた点も高く評価できる。アーカイブデータはプロジェクト専用のウェブサイトおよび京都大学のレポジトリ（KURENAI）にて保存・公開されており、今後データの利活用が可能な状態にある。さらに、ELSI カタルシルなど市民対話を進め、トランスサイエンスのモデル構築のための初期的な検討を実施してきた点も、本プロジェクトの重要な成果である。

もっとも、「社会一般に向けた提言」や、一般の人々がアーカイブを活用する方法など、プロジェクトで得られた知見を社会に還元するための体系的な構想が示されていれば、さらなる発展が期待できたと思われる。「トランスサイエンス問題に貢献する人文社会系研究者のモデル」については、すでに行われている、コミュニケーションに関する議論に加えて、ELSI 視点での整理を進めることが望まれるところである。

（3）研究開発プログラムの目的達成への貢献度

十分な成果が得られたと評価する。

COVID-19 パンデミックの ELSI という緊急性の高いテーマのアーカイブに取り組む課題として、パンデミック対応に関する ELSI の重要性を広く発信し、社会的議論の基盤を築いた点が評価できる。特に、政策立案者やメディア関係者との連携を強化し、ELSI 課題を社会に浸透させる試みは非常に有意義であった。また、アーカイブ化という研究手法の実践例としても意義があり、今後の活用が期待される。

アーカイブデータをプロジェクト専用の WEB サイトおよび京都大学のレポジトリ（KURENAI）にて公開することで、プロジェクトの成果がさまざまなステークホルダーによって長期的に活用されることが期待される。ただし、中長期的に成果が活用されていくためには、今後も継続的なデータの蓄積および積極的な周知が必要である。加えて、活用する立場の視点も踏まえたアーカイブの構造についての検討も、継続的になされる必要がある。

人文社会系研究モデルの構築や、パンデミック時の日本の特色の解明に取り組んだ本プロジェクトは、総合知による ELSI へのアプローチ、日本の文脈での ELSI の探求、根源的問いと言説化という、プログラム全体の目標・活動の観点からも重要な立ち位置にある。さらに、深めるべき論点も示されており、プロジェクト終了後になされる成果発信に期待する。

なお、新型コロナウイルス時の日本の対応については、先に述べた法制度や、接触確認アプリ COCOA など、問題点を掘り下げることが必要な点が多いと思われる。将来的に取るべき対応の提案自体は本プロジェクトのミッションではないが、今後同様の問題が発生したときの対応における活用も見据えたアーカイブのあり方について、さらなる検討を期待したい。

以上

（別紙）評価者一覧

〈プログラム総括〉

唐沢 かおり　東京大学 大学院人文社会系研究科 教授

〈プログラムアドバイザー〉

大屋 雄裕　慶應義塾大学 法学部 教授

四ノ宮 成祥　国立感染症研究所 客員研究員

中川 裕志　理化学研究所 革新知能統合研究センター
社会における人工知能研究グループ チームリーダー

西川 信太郎　株式会社グローカリンク 取締役
／日本たばこ産業株式会社 D-LAB シニアディレクター

納富 信留　東京大学 大学院人文社会系研究科 教授

野口 和彦　横浜国立大学 総合学術高等研究院 リスク共生社会創造センター 客員教授

原山 優子　東北大学 名誉教授

水野 祐　シティライツ法律事務所 弁護士

山口 富子　国際基督教大学 教養学部 教授

（2025 年 5 月末時点）